

# 本気の残薬管理

福井 繁雄 ●一般社団法人Life Happy Well 理事



ある日の残薬

## 1. 背景と目的

### 残薬管理を徹底する、絶対に!

19歳のときに祖母の薬剤管理をしながら、日本の医療は残薬が増えるシステムだと感じていた。患者が主治医には何も話せない。

- 副作用が出たり、効果が出なくても主治医に言えない。
- 服用しないからどんどん残薬になっていく。
- 症状もよくなならない。かつ、新しい薬が処方される。

これは私の祖母だけではなく、日本全国で同じ現象が起こっているのだと考えた。

この残薬管理を私たち薬剤師が徹底的にできないのか。患者を取り巻く環境を変えられないのか。

最初は残薬を把握していないことで、間違った薬を飲んでしまい、救急搬送された記事を新聞へ投稿した。そこから専門誌への掲載、認定薬剤師研修会での啓蒙活動、SNSの活用等で、医療業界ではない方々へも残薬管理がいかに大切かを訴え続けてきた。必要な残薬とゼロにしたい残薬を明確にしたい。

## 2. 取り組みの方法

### 残薬ゼロへの挑戦

#### ①患者個人の残薬管理

まず、残薬が何か、それを管理することでどういう利点があるのかわかりやすく説明していく。その上で、残薬を薬局に持参もしくはは訪問しながら、様々なケアを行っていく。

#### ②薬局内で不動態になりやすい薬剤を抽出し原因を追究

- 局内在庫の見直し(毎月)
- 返品不可薬(冷所保存薬など)の徹底管理
- 局内を越えて、他薬局との不動態連携  
これらを浸透させるために研修会を行う。

#### ③医師だけでなく患者を取り巻く人々へ残薬の周知

- 薬局・介護関係、役所職員への啓蒙活動(ポスター、声掛け等)
- ブラウンバッグ(残薬袋)の活用

#### ④残薬の薬価ベースでの金額の認識

薬局・患者への金額提示。

#### ⑤②に関連するが、症状だけでなく、時季的に服用しているか否か

薬剤の発注方法を研修する(残薬学として)。

## 3. 期待される成果

### 残薬整理から変わる世界

患者の残薬が適正数になることは、医師の診断、ケアマネジャーのケアプランなどにも影響を与える。服薬管理もできる。また適正数になることで廃棄される薬剤が減少し、環境破壊も軽減できる。何より個々人の生活費用の削減にもなる。地域連携センターや患者家族にも、常に啓蒙を実施する。一人ひとりが自分の残薬を見直すことが健康への第一歩と言える。これを全国、全世界に広げていきたい。